法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-31

〈読書ノート〉東ドイツ社会主義の盛衰から言論の自由と民主主義の価値を考える ： マクシム・レオ著／木畑和子訳『東ドイツ　ある家族の物語：激動のドイツを生きた，四代のファミリーヒストリー』を読む

SHINDO, Rikako / 進藤, 理香子

(出版者 / Publisher)
法政大学大原社会問題研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大原社会問題研究所雑誌 / Journal of Ohara Institute for Social Research
(巻 / Volume)
783
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
63
(発行年 / Year)
2024-01-01

■読書ノート

東ドイツ社会主義の盛衰から言論の自由と民主主義の価値を考える

——マクシム・レオ著／木畑和子訳『東ドイツ　ある家族の物語：激動のドイツを生きた，四代のファミリーヒストリー』を読む

進藤　理香子

1　作品について
2　本書の構成とあらまし
3　批評

1　作品について

本書は2009年にドイツのカール・ブレッシング出版社より刊行された，著者マクシム・レオ（Maxim Leo, 1970-）自身の家族四世代をめぐる回想録の邦訳版である[(1)]。ベストセラーとなったドイツ語版のみならず，英訳版をはじめ欧州各国語でも出版され，2011年にはフランス語版がヨーロッパ文芸賞（Prix du livre européen）を受賞した。邦訳版の訳者である木畑和子（成城大学名誉教授）によれば，ドイツ語原題（*Haltet euer Herz bereit : Eine ostdeutsche Familiengeschichte*）は未来への希望を謳った賛美歌の一節からとり，直訳すれば『心構えをせよ。ある東ドイツのファミリーヒストリー』（訳者あとがき，341頁）となる。

ドイツは20世紀の間に帝政，ヴァイマール共和制，ナチス独裁，占領体制，東西ドイツ，再統一と数次にわたる体制転換を繰り返した。本書では，かつて社会主義国家として存在した東ドイツ（＝ドイツ民主共和国，DDR[(2)]）に生きた人々の生きざまを通じて，ドイツの長い激動の20世紀が辿られてゆく。本作品は著者自身の家族を対象とした極めて私的な心象風景とも言え，回想・ノンフィクション分野の文芸書に分類されるものであり，その意味において史学研究の学術書ではない。とはいえ，家族四世代目にあたる著者の「僕」（マクシム・レオ）による一人称形態の語りのみならず，当事者へのインタヴューや，ところどころシュタージ文書と呼ばれるかつての東ドイツ

(1)　ドイツ語版の初版書誌情報はMaxim Leo, *Haltet euer Herz bereit : Eine ostdeutsche Familiengeschichte*, Karl Blessing Verlag, München 2009である。訳者の木畑によれば，現在は2011年に刊行されたペーパーバック版（Wilhelm Heyne Verlag, München）のみが入手可能とされる。

(2)　Deutsche Demokratische Republik = DDR.

国家保安省による追跡記録などの裏付けを交えた客観的描写を通じ，本作品は実にリアリティーに富み，ナチスへの抵抗，東ドイツ建国への道のり，社会主義建設の発展と限界，崩壊とその後，といった展開が，家族四世代それぞれの眼を通じて至極スピーディーに描き出され，読者は息つく間もなく完読させられてしまう。

読者をこれほどまでに惹き付ける本作品の魅力とはいったい何なのであろうか。それは何よりも本作品の主人公たるレオという一家が，東ドイツの平凡な一般家庭とはおよそかけ離れた，ある特別な地位にあったことに起因する。一家の大黒柱である母方の祖父ゲアハルト・レオ（Gerhard Leo, 1923–2009）は，ヴァイマール時代の 1920 年代末にナチ党宣伝部長のヨーゼフ・ゲッペルスを相手に勝訴したユダヤ人弁護士ヴィルヘルム・レオ（Wilhelm Leo, 1886–1945）を父にもつ。ゲアハルト自身は，1930 年代にナチスに追われてフランス亡命後にレジスタンスに参加し，戦後は反ファシズムの闘士としてドイツへ戻り，エリート党員として東ドイツ社会主義建設に貢献した[(3)]。ゲアハルトは，ナチスに抗したのは，ユダヤ人として迫害されたからではなく，共産主義者としての立場からだとして生涯それを誇りにしていた。戦後に生まれたゲアハルトの娘アンネ，そして娘婿ヴォルフ，さらに著者である孫の世代がどのように家長ゲアハルトに対峙したのか，その親和性あるいは距離感が，同時に東ドイツ建国以後の後継世代の国家に対する態度表明として描きだされてゆく。

家族成員の重要人物を挙げると，まず著者のマクシム・レオは 1970 年に東ベルリンで生まれ，社会主義の内からの浸食と瓦解が進行する 1980 年代に 10 代の多感な時代を過ごした。ドイツ統一後は日刊紙『ベルリーナー・ツァイトゥング（*Berliner Zeitung*）』の編集部に属し，文筆家としての評価も高く他作品でも受賞歴がある[(4)]。著者の母アンネは本名をアネッテ・レオ（Annette Leo）と言い，東ドイツ時代に同様にして『ベルリーナー・ツァイトゥング』の編集部にいた経験をもつが，当時のジャーナリズムにおける言論統制に限界を感じ，後に歴史学の道に進んだ。現在はホロ

---

(3)　フランスでのレジスタンスの経験を綴ったゲアハルト・レオの回想録（Gerhard Leo, *Frühzug nach Toulouse*, Verlag der Nation, Berlin 1988）は東ドイツ末期の 1988 年に出版された。ゲアハルトは東ドイツ時代に国際ジャーナリストとしての名声を挙げ，1961 年にはアイヒマン裁判の取材に東ドイツから特派員としてイスラエルへ派遣された。Raphael Brüne, *60 Jahre Eichmann-Prozess - zwischen Identifikation und Instrumentalisierung. Gerhard Leos andere Perspektiven auf den Jerusalemer Jahrhundertprozess*. https://www.bpb.de/themen/deutschlandarchiv/331105/60-jahre-eichmann-prozess-zwischen-identifikation-und-instrumentalisierung/（2023 年 9 月 24 日閲覧）。

(4)　マクシム・レオはジャーナリストとしての評価も高く 2002 年には独仏ジャーナリスト賞（Deutsch-Französischer Journalistenpreis），2006 年にはドイツの優秀な新聞記者に与えられるテオドール・ヴォルフ賞（Theodor-Wolff-Preis）を受賞している。2009 年に出版された本作品と同様の自叙伝的なノンフィクション作品では，1930 年代にユダヤ人としてナチスの迫害を受け，ドイツからロンドンをはじめとして世界各国へ亡命していった自らの祖父母世代の家族・親類らについて記した作品（Maxim Leo, *Wo wir zu Hause sind : Die Geschichte meiner verschwundenen Familie*, Verlag Kiepenheuer & Witsch, Köln 2019）でも高い評価を受けている。

コースト問題などを中心に史学分野で多くの研究著作を発表している[5]。この文筆業への傾倒という家族的伝統は，そもそもアンネの父であり，著者の祖父であるゲアハルトが全ドイツ通信社（ADN[6]）の海外特派員として，またドイツ社会主義統一党（SED[7]）の機関紙『ノイエス・ドイッチェラント（*Neues Deutschland*）』の外交部長として，スイスやフランスに長く駐在した著名なジャーナリストであったことに遡る。これに対し，著者マクシムの父でアンネの夫であるヴォルフは体制に懐疑的な芸術家として東ドイツに暮らし，家庭内でしばしば義父ゲアハルトとぶつかったが，ゴルバチョフの登場まではヴォルフもまた公共の場では静かな抵抗に収まらざるを得なかった。このヴォルフの実父，すなわち著者マクシムの父方の祖父ヴェルナーは，かつてナチス体制下にベルリン・オリンピックに参加するなどドイツ人として誇らしい青春時代を謳歌したが，召集され極限の捕虜生活という辛酸をなめ，ナチスの幻想に失望した。戦後は東ドイツで苦学して学校長となり社会主義建設のために人生を捧げた人物であった。そしてもう一人，レオ家に影を落としていたのが，ゲアハルトの妻でアンネの母であるノーラの父（著者の母方のもう一人の曾祖父）ダーゴベルト・ルビンスキー（Dagobert Lubinski, 1893–1943[8]）の存在であった。彼は1920年代末期にモスクワの方針に背いたとしてドイツ共産党（KPD[9]）から除名され，党から分離した新たな共産主義者グループ（KPO[10]）を立ち上げたユダヤ人の活動家であったが，アウシュヴィッツで最期を迎えた。東ドイツの歴史記述では転向者としての烙印を押され，ダーゴベルトについて家族内で話すことはほとんどなかったが，後にこの事実が，アンネを歴史家の道に進ませる原動力となった。

2　本書の構成とあらまし

本書は全23章とプロローグ，エピローグ，そして詳細な訳者あとがき，から成る。各章の表題にはドイツ語原本にはなかった副題が邦訳者により添えられている。内容的に重複・連続する諸章

(5)　歴史家としてのアネッテ・レオは，現代史を中心に多くの作品を発表しており，なかでもユダヤ人のドイツ共産主義者として1930年代にソ連へ亡命し，戦後に東ドイツへ帰還した言語学者ヴォルフガング・シュタイニッツの伝記（Annette Leo, *Leben als Balance-Akt : Wolfgang Steinitz ; Kommunist, Jude, Wissenschaftler*, Metropol Verlag, Berlin 2005），またナチス時代に主に女性が収容されていたラーフェンスブリュック強制収容所に関する作　品（dies., *"Das ist so'n zweischneidiges Schwert hier unser KZ …" : Der Fürstenberger Alltag und das Frauenkonzentrationslager Ravensbrück*, Metropol Verlag, Berlin 2007），あるいは東ドイツの作家エルヴィン・シュトリットマターの伝記（dies., *Erwin Strittmatter : die Biographie*, Aufbau Verlag, Berlin 2012）などが代表的である。

(6)　Allgemeiner Deutscher Nachrichtendienst = ADN.

(7)　Sozialistische Einheitspartei Deutschlands = SED.

(8)　ダーゴベルト・ルビンスキー（Dagobert Lubinski）の人物情報について以下参照，*Deutsche Kommunisten: Biographisches Handbuch 1918 bis 1945*, hrsg. v. Hermann Weber und Andreas Herbst, Karl Dietz Verlag, Berlin 2008, https://www.bundesstiftung-aufarbeitung.de/de/recherche/kataloge-datenbanken/biographische-datenbanken/dagobert-lubinski（2023年9月24日閲覧）。ルビンスキーはKPO時代にその機関紙『*Gegen den Strom*（流れに抗して）』においてE. L.（= Erich Lessing）の筆名で原稿を執筆していたとされる。

(9)　Kommunistische Partei Deutschlands = KPD.

(10)　Kommunistische Partei-Opposition = KPO.

は一括りにしつつ以下，要約解説する。

プロローグ「僕の祖父ゲアハルト」。時は現代，東ドイツの終焉から18年が経過している。著者マクシムが祖父ゲアハルトを病院に見舞うシーンから始まる。この日，かつての英雄ゲアハルトの老衰した姿を見て，はじめて著者のなかで東ドイツが名実ともに終焉したような感覚に陥る。この日を境にマクシムは自身の一家の歴史に取り組むことを決意する。

第1章「店舗の家　僕の家族」。マクシムの両親について語られる。著者の両親ヴォルフとアンネは東ドイツ時代の結婚当初，戦前の住宅が未改修のまま残された東ベルリン・プレンツラウアーベルク地区に居住していた。マクシムもここで生まれた。統一後の現在，この地区はベルリンのカルチャーシーンの中心部となり，洒落た店が立ち並び，西側の新しい所有者らによって占拠されている。芸術家として体制に批判的であったヴォルフは東ドイツ消滅後にアンネと別れ，今では古い屋根裏部屋にひっそりと暮らしている。父とは対称的に，マクシムは新聞社で良い給料で働き，フランス女性と結婚し，新しい生活様式を享受している。父ヴォルフはそんな息子の姿を見ては「ヴェストラー（西ドイツ人）」（20頁）だなと揶揄する。

第2章「秘密　母アンネの子供時代」。アンネは1948年にフランスから帰還したゲアハルトの長女としてドイツ西部のデュッセルドルフで生まれた。当時，一家はナチ党員から占領軍によって接収された壮麗な屋敷に住んでいた。だがゲアハルトはある日，突如として家族の前から消え，東ドイツへ行ってしまう。1952年にアンネは母と共にスキー旅行の名目でゲアハルトの待つ東ドイツへ向かい，そのまま留まり続けることとなった。ゲアハルトはジャーナリストとしてのみならず，共産党の諜報機関での任務にも携わっており，西へ帰れば逮捕される危険があったのだ。一家は東の当局から黒塗りのヴォルガ（ソ連産の高級車）で出迎えられ東ベルリンへ向かった。ゲアハルトは間もなくして東ドイツの全ドイツ通信社ジュネーヴ特派員として西側での生活をおくる特権を得た。アンネも休暇中に両親に会いに行くことができたが，そのような渡航は，ベルリンの壁が1961年8月に建設されて以来，西への通行が禁止された一般の東ドイツ市民には許されないものであった。

第3章「確信　新聞社でのインターンシップ」，第4章「告発　体制とのせめぎあい」ではアンネの青春時代とプラハの春をめぐる葛藤が語られる。アンネは17歳になると，特例としてドイツ社会主義統一党への早期入党を地区指導部から勧められ，喜んでそれに応じた。若い者にとって「党は絶対的な真理，絶対的な知」（45頁）であり，党を批判するのは敵だけであった。だがアンネは後に入党をひどく後悔した。彼女は19歳という若さで日刊紙『ベルリーナー・ツァイトゥング』の記者見習いとなったが，それは父ゲアハルトの後光であった。だが，東ドイツのジャーナリズムは本当の意味においては機能しておらず，ドイツ社会主義統一党中央委員会は検閲リストを日々更新して各社へ伝達し，編集委員会はそれに従って検閲した記事のみを印刷にまわした。

1968年8月，ソ連の戦車がプラハの春を蹂躙すると，東側では「チェコスロヴァキア政府がソ連へ救援を要請したため」との情報が発表された。これに対して西側のテレビはソ連軍が民主化運動を指導したドゥプチェクを逮捕し，プラハ市民が血まみれになって抵抗する様子を放映した。アンネをはじめ多くの若者は自分の祖国と偉大なモスクワに裏切られたと感じた。アンネの友人らはソ連批判のビラを撒いて当局に逮捕された。1968年9月，アンネはベルリン・フンボルト大学に

入学したが，最初のゼミで，ソ連のプラハ進駐を歓迎する声明に署名することを持ち掛けられ，拒否すれば大学に居られなくなる圧力があった。学内党集会の光景はおぞましいものであり，教員二人が壇上に立たされ，プラハの春におけるソ連の行為を非難したかどで糾弾されていた。自己批判の紙を貼り付けられ侮辱される中国の文化大革命と同じであった。大学では常に思想が検査された。

第5章「ストリートチルドレン　父ヴォルフの子ども時代」，第6章「不良少年　ヴォルフの青春」では著者の父方の出自について語られる。アンネの夫であったヴォルフの父ヴェルナーは1944年にヴォルフが2歳の時に出征した。ヴェルナーはフランスの捕虜から帰還後に東ドイツで教員となりドイツ社会主義統一党の旗振り役となった。その息子ヴォルフは口うるさく時に暴力を振るう父を遠ざけるようになった。ヴォルフは印刷工見習いとして働いたが，次第に西の文化へ傾倒する不良少年として警察に目を付けられ，社会主義的人間へ再教育するために国家人民軍の兵役に送られた。除隊後，ヴォルフはグラフィックデザインの専門学校へ行き，東ドイツでは珍しいフリーのイラストレーターとなったが生活は厳しかった。

第7章「ルーツ　二人の祖父」，第8章「ベルリン国立オペラ劇場　ゲアハルト一家フランスへ亡命」では，著者の母方の祖父であるゲアハルトとその父ヴィルヘルムについて示される。ゲアハルトは1923年にベルリンで生まれた。その父ヴィルヘルム・レオはクーダムで有力な国際法律事務所を率いる弁護士であった。レオ家は18世紀にワルシャワからベルリンへ移住した裕福なユダヤ人一家であり，本来のレーヴィーンという名をプロイセン読みのレオに改名したのみならず，プロテスタントにも改宗し，ユダヤ系の痕跡を消そうと努めた。1927年にヴィルヘルムはフランスの退役将校からゲッペルスの虚偽の主張に対する訴訟を起こすことを依頼された。ゲッペルスは自身の内反足がフランス軍の拷問に起因すると主張していた。弁護士ヴィルヘルムはそれが生来のものであることを証明したため，ゲッペルスは敗訴し世間の嘲笑の的となり，復讐を誓った。1933年2月28日の国会議事堂炎上の夜，ヴィルヘルムはトラックで自宅へ押し掛けたナチス突撃隊SAの隊員らに殴打され収容所へ連行された。ヴィルヘルムは知人の助けでそこから釈放されたがさらなる危険が迫ったため，レオ一家は密輸人の助けを借りドイツを去り，ベルギー経由でフランスへ逃れた。ヴィルヘルムはパリでドイツ語書籍専門店を開業し，著名なドイツ人亡命作家らの拠点となった。ヴィルヘルムが昔，ジュネーヴで国際法を学んでいたときの学友に，後にフランス首相となったピエール・マンデス＝フランスがいたことは亡命中の助けとなった。しかしドイツによるフランス侵攻後の1940年にはヴィルヘルムを含むドイツ人亡命者は一斉に収容所へ行くよう命令された。息子のゲアハルトは未成年のため収容所送りを免れた。

第9章「警告　キッチンボーイからレジスタンスへ」，第10章「拷問　ゲアハルトの逮捕」，第11章「敵　パルチザンへ，そして共産党員に」，第12章「勝利者　ドイツ軍の降伏」ではゲアハルトがいかにして反ファシズムの闘士となったのかが示される。1940年夏，フランスはドイツ占領下となり，ユダヤ人狩りが始まった。ゲアハルトは亡命した他のドイツ人たちと一緒にレジスタンスへ参加したが，1944年にドイツ軍を阻むための諜報活動中に逮捕された。ナチス親衛隊SSから拷問を受け，前歯4本と肋骨5本が折れた。だが死刑目的でパリへの移送中にパルチザンの急襲によって奇跡的に救出された。かれらはフランス義勇遊撃隊と呼ばれ，その全員が共産党員であった。ゲアハルトは共産党に入党し，この日から党は彼にとって運命共同体となった。間もなくし

て，連合軍が北フランスから上陸し，大規模な反撃を開始した。ゲアハルトがフランスへ亡命してからすでに10年以上が過ぎていた。

第13章「玩具　ナチ党員になった父方の祖父ヴェルナー」，第14章「日記　ヴェルナーの捕虜生活」，第15章「痛み　ヴェルナーの帰還，そして社会主義者に」では著者の父ヴォルフの実父であるヴェルナーの出自について語られる。ヴェルナーの父親は農村の出であったが，第一次世界大戦後にベルリンへ出てきて工場労働者となった。家庭は貧しく，ヴェルナー自身も進学の道を諦め，見習い工となったが大恐慌の最中，徒弟終了後に解雇となった。その後，ヒトラー政権下の経済復興を経験し，鋳型工場で職を得，他の大勢と同様にヴェルナーもまたナチスを信頼するようになった。ヴェルナーとその妻となるジークリートは体操クラブで知り合い，1936年のベルリン・オリンピックへの参加も許された。ヴェルナーは「あれはすばらしい時代だった」（172頁）と思い出す。だが1944年に彼は召集され，アメリカ軍の上陸を押しとどめるために西部に配置されたが激戦の末に降伏し，捕虜となりフランスの収容所へ送られた。1947年にドイツへ帰還したが，捕虜時代の苦しみを家族に話すことはなかった。ベルリンでは苦学し教育大学試験に合格し教員となり，共産党員の優秀な同僚に感化されてマルクス・レーニン主義の勉強にいそしんだ。ヴェルナーはドイツ社会主義統一党に入党し，各学校を廻り党政策を吹聴し，党員ではない校長らを解任した。戦災の瓦礫撤去への無償労働も積極的にこなした。1953年にヴェルナーは党中央委員会から表彰され，スターリン通りの立派な集合住宅の居住権を授与された。ヴェルナーは，労働者の出自であっても，社会主義国家ではひとかどのものになれることを示していた。

第16章「疎外　ゲアハルトとDDR国家」。ゲアハルトは終戦直後から共産党諜報機関に雇われていた。彼の任務は，西ドイツで過去を隠して生活しているかつてのナチス親衛隊SSの隊員などを見つけては，こちらの要求をのまなければ戦争犯罪者として公表すると脅しつけて，西側政局内部の情報を秘密裡に提供させていた。だがゲアハルトの西側コネクションが強かったことから，東ドイツ当局は猜疑的となり，同時にゲアハルトの行動を監視していた。1952年というスターリン死去の一年前にゲアハルトも東ドイツで粛清の対象となりかけたが，その嫌疑は上層部の手助けで運良く晴れ，むしろ全ドイツ通信社ジュネーヴ特派員という好待遇が与えられた。著者マクシムはこれらの事実を後にシュタージ文書の閲覧から初めて知った時，なぜ祖父ゲアハルトが多くのフランス人を殺害した憎むべきナチス親衛隊の犯罪者らを利用するようなことに同意したのか理解に苦しみ，ゲアハルトの心の葛藤を思いやった。

第17章「衝突事故　僕とDDR」。東ドイツの学校では，ベルリンの壁は，西のファシストから「平和が守られるように」（233頁）に必要であると教えられていた。1970年代の後半，ピオニールへの参加も学校での社会主義に関する授業も，教師，生徒，親の誰もがやる気がなく，適当にやっていた。子供らの間では，西のテレビや雑誌など，西のものが流行った。転校したベルリン・カールスホルストの中学・高校では自由ドイツ青年同盟（FDJ [11]）の活動があったが，キリスト教の授業を受けるために教会に行くこともできた。男子高校生は二週間の軍事訓練を受けた。著者の両親であるヴォルフとアンネはお互い考え方が違うため，よく喧嘩になった。ヴォルフは「DDRは社

(11)　Freie Deutsche Jugend = FDJ.

会主義を裏切った党幹部の独裁」,「犯罪者国家」,「DDR 監獄」（241 頁）であると言っていた。父ヴォルフにとっては，DDR は改革すべき対象であった。それに対して,「僕」（マクシム）にとっては，DDR はどうでもよいというものであり，関心がなかった。マクシムは 1953 年 6 月 17 日の東ベルリン労働者蜂起がソ連軍によって鎮圧されたことを知っていた。にもかかわらず，学校の課題では，蜂起の原因は「DDR の労働者階級に被害を与えようとした反革命的挑発と西ドイツのスパイがいた」（241 頁）からであると，大人たちが望むような解答を書いた。それについて後ろめたさはなかった。

第 18 章「小さな事　シュタージからの働きかけ」，第 19 章「異議申し立て　順応か抵抗か」。ここでは著者の両親の体制とのかかわり方が描かれる。ある日，アンネとヴォルフはシュタージの訪問を受け，協力者となれるかどうか試されたことがあった。抗しがたい圧力があり，西側からの郵便の受取りを許すと，次第に要求を釣り上げ，家の鍵を渡すことを打診されたので，ヴォルフは自分たちの生活を守るために協力を断った。ヴォルフは子供向けテレビ番組の絵を描いて暮らしていたが，80 年代には体制批判的なニュアンスのあるモチーフを用いた絵葉書で個展を開くまでになった。1987 年にはベルリン 750 年祭の舞台制作においてチーフデザイナーの地位についた。東ドイツの首都を西側に対して誇示する役目があった。ヴォルフの労作を称え，東ベルリン市長から賞が与えられることになったが，彼は自分の信条からそれを断った。

第 20 章「同行者　アウシュヴィッツで死んだ母方の曾祖父」。アンネは言論の自由がない東ドイツの新聞社での仕事に限界を感じ仕事を辞めた。フンボルト大学で歴史学博士課程に進み，スペインの労働運動について調べるなかで，マルクス・レーニン主義研究所の図書室には有害図書所蔵室があることがわかった。そこには東ドイツで禁書となっている本だけ所蔵されていた。それらの大半は，ブルジョア的歴史家の書籍ではなく，むしろ左翼の逸脱者のものであり，党が最も恐れていた相手であったトロツキスト，ユーロコミュニスト，日和見主義者，修正主義者と見做された社会主義者たちの著作品であった。アンネはこの図書室で禁書を読む機会を得て，トロツキーやソルジェニーツィンを読んだ。まさに目から鱗が落ちるようであった。こうしてアンネは，ソ連共産党とドイツ社会主義統一党が主張するマルクス・レーニン主義は唯一絶対の教義ではなく，社会主義の理論は多様にあることを知った。これをきっかけに彼女は，東ドイツの公式歴史記述で「右派の裏切り者」,「日和見主義的転向者の敵対的陰謀」との烙印をおされた，母方の祖父であるユダヤ人共産主義者ダーゴベルト・ルビンスキーのことを調べ始めた。1920 年代末にドイツ共産党とドイツ社会民主党との協調の必要性を訴えたダーゴベルトは，共産党以外の左派を認めないとするモスクワの方針に反したとして，ドイツ共産党から除名された。かれは離党した者たちを集めた共産主義者分派グループ（KPO）を組織したが，ナチ時代に長期間にわたり収監されたのち，1943 年にアウシュヴィッツで虐殺された。ダーゴベルトの家族は皆，絶滅収容所で殺されたが，その娘のアンネの母のみは奇跡的に難を逃れた。

この母方の祖父の過去を知った後，アンネは黙っていられなくなった。一つの教義だけではなく，社会主義についてもっと話ができる社会になるべきであると思われた。言論の自由を制約する東ドイツには改革の必要があった。アンネは博士号取得後，ジャーナリズムを諦め，フリーとなりヴォルフのように家で仕事をするようになった。こうしてアンネはようやく体制側から離れた。

第21章「信仰告白　西ドイツへの憧れ」。著者マクシムは，上級高等学校への入学資格に不十分という成績判定を学校から下され，大学進学の路線から外された。その母アンネは学校側に抗議したが判定を覆すことはできなかった。マクシムは16歳で職業教育，工場での見習いとして辛い仕事をこなす日々となり，自分がこれまでいかに親の家，文筆家や芸術家などといった特権階級のなかで守られていたのかを知った。夜間学校に行って大学受験資格を目指すことにした。そこでは体制批判的な教師が多く，授業は自分の意見を率直に述べることを重視し，刺激的であった。1986年に祖父ゲアハルトは孫のマクシムにフランスでレジスタンスとして闘った思い出の地を見せたいとして，東ドイツ当局へフランスへの渡航を申請した。普通の東ドイツ市民が西側へ渡航するなど考えられない時代であった。帰国は西ベルリンを経由したが，マクシムはこの時から東を捨てて強く西へ行きたいと思うようになった。

第22章「春の兆し　DDR体制終焉の気配」。1988年には多くが崩壊していった。ゴルバチョフが始めたペレストロイカとグラスノスチが東ドイツにも必要だとの意識が国民の多くに広がった。言論の自由のない社会に耐えられなくなったアンネはここに及んでドイツ社会主義統一党から離党した。すでに東欧諸国の西ドイツ大使館は東ドイツ人の亡命者であふれかえっていた。1989年8月，マクシムはアンネとリヒテンベルク救世主教会の公民権運動の集会へ行った。改革の活気にあふれていた。この経験から，「僕」は今，西に逃げるよりもここに留まってこの動きのなかにいる方がずっと刺激的であると感じた。街のなかの誰もがそのような気持ちであった。町は異様な雰囲気で，大規模な決起の直前のような緊張感がみなぎっていた。アンネは1989年9月に新フォーラム（Neues Forum）に参加し，改革を求める市民運動を始めた。ヴォルフ，アンネの家にはたくさんの反対派が訪れてきた。これまでの東ドイツではなく，複数政党制，民主主義，しかし私的所有のない，すべてが本当に国民に属するという別の社会主義国家への改革が議論された。

第23章「シュプレヒコール　壁崩壊前夜」。ライプツィッヒの月曜デモがテレビで報道された。東ドイツ建国40周年にあたる1989年10月7日，最初の大規模デモが首都ベルリンで決行されとのうわさが流れた。集合は17時でアレクサンダー広場の世界時計だった。当日，ラジオではゴルバチョフらがベルリンの式典へ到着したことを伝えていた。マクシムはデモに参加し，デモ隊と警察や国家保安省の部隊が衝突したのを目前にした。翌日，マクシムはシュタージらに逮捕され尋問を受けたが，女友達が持っていた反体制派の教会新聞の出所を聞かれ正直に話すと釈放された。その一か月後の11月9日の晩，西ドイツのテレビニュースで壁が開かれたことを知った。マクシムはすぐに壁へ行き，国境を越えた。母アンネは壁に行きたいとは思わず，家に留まった。翌朝には東ドイツはほとんど消滅していた。

エピローグ。ドイツ再統一が実現した後，マクシムは，あれほど憧れた西ドイツ人と同じ国民となったにもかかわらず，東出身ということで二級国民扱いされ，西の人々から蔑視されていることに憤る。その父ヴォルフは，改革のために闘争した東ドイツ国家はあっさり消滅してしまい，すっかり創作意欲を失ってしまった。家族が居住していた家も別荘も，西ドイツに住む本来の所有者から返還請求を受けた。マクシムは後になって，西の所有者に返還されたかつての別荘がなお居住されずに放置されていることを知り，賃貸という形でもう一度手に入れ，東ドイツの日々の詰まったその思い出の場所をつなぎとめた。

3　批評

以上が，本書のあらましである。本作品を貫くテーマは，大きく分けて二つある。その第一は，ジャーナリストという家族的・職業的伝統のなかで世代を通じて問われ，そして闘われる，言論の自由の価値である。そして第二に，国家の存在の問題である。それは同時に，一，なぜ社会主義ドイツの建国が必要であったのか，二，それはなぜ機能しなくなったのか，そして三つ目に，東ドイツという国家は改革すれば存続できたのであろうか，という三つの問いへと導く。その一つ目は，凡そ対照的な出自にあった二人の祖父がそれぞれの立場において社会主義建設に邁進してゆく姿を通じて明らかとされた。ゲアハルトの場合には，ユダヤ人としての迫害と反ファシズム闘争の経験を背景として芽生えた「ナチが二度とチャンスをもてないような新たな社会をつくる」（225 頁）という願いであった。ゲアハルトにとって「DDR はこの闘争の結果であり，報酬であり，人生の意味であった」（226 頁）のだ。対して，戦前は「小ナチ」（25 頁）で，戦後は東ドイツで教員となり，党の旗振り役として「小スターリン主義者」（25 頁）となったヴェルナーの場合にあっても，戦争と捕虜生活を自ら経験して到達したナチスへの深い反省から，新しい社会を建設することに懸命となったことに違いない。だがヴェルナーから距離を置くことに努めるその孫マクシムは，一介の労働者から学校長へと社会的上昇を果たしたヴェルナーを「社会主義的市民の一種の手本のようなもの」（209 頁）と皮肉を込めて評する。

祖父世代には希望に燃えていたはずの社会主義国家は，なぜ機能しなくなったのであろうか。息子・娘世代のヴォルフとアンネは検閲なしには記事を書くことも自己の考えを述べることもできない閉鎖性にもがき苦しんだ。二つ目の問いである，東ドイツ社会主義の失敗の原因とは，まさにこの言論の自由の制約という壁にあったのだ。共産党から離脱した共産党分派のダーゴベルトが党公式歴史記述において異端者扱いされることの理不尽さに目覚めたアンネは，ソ連共産党とドイツ社会主義統一党が掲げるマルクス・レーニン主義だけが唯一絶対の教義ではなく，社会主義に至る道とその理論は複数存在し，その多様性を容認し議論できる社会，自分の意見を恐れなく主張できるような社会こそが必要なのだ，との確信に至る。東ドイツの末期に「私は現実を否定する我われの指導部ともうこれ以上ともに歩むことができません」（304 頁）との手紙を提出し，アンネはドイツ社会主義統一党から離党する。このくだりは，見えざる思想・言論統制とまったく無縁とは言い切れない，現代の世界に生きる全ての人々の心に響く。

とはいえアンネは東西ドイツの再統一を望んでいたのであろうか。否，彼女は壁が開放されても西へ渡ることを望まず，自分が育った国の民主化と，国民一人一人に立脚する真の意味での社会主義国家としての再生を願った。その父ゲアハルトもまた「DDR は改革可能な社会主義国家だった」（訳者あとがき，337 頁）と東ドイツが消滅後にきっぱり言い切ったとされる。こうして東ドイツは改革すれば存続可能であったのか，との三つ目の問いへの答えは出されたことになる。

だが事実と照らせば，かつての東ドイツ市民の誰もがゲアハルトやアンネと同じ意見であったわけではない。民主化を訴えて立ち上がった市民の大半は，ベルリンの壁の開放後は，もはや単なる体制の改革要求にはとどまらず，むしろ一気に西ドイツとの統一支持へとなだれ込んでいった。そ

れには西ドイツ側からの通貨統合をめぐる譲歩提案や西の消費社会への羨望のみならず，むしろ一層，ソ連型社会主義国家に付き物であった秘密警察，すなわち東ドイツをドイツ第二の独裁体制と言わしめた悪名高きシュタージによる監視体制への反発が，人々を社会主義体制への決別へと強く突き動かしたのではなかろうか。一説では，壁崩壊後の 1990 年 3 月 18 日に実施された初の民主主義的な人民議会選挙では，東ドイツの有権者のおよそ 4 分の 3 がドイツ再統一を支持あるいはそれに同意することを表明した民主的，自由主義的な諸政党に対し投票したとされる。対して，統一に反対したそれまでの支配政党であったドイツ社会主義統一党系の左派政党（SED-PDS [(12)]）は 16.4% を獲得したのみで，残りはその他の小政党支持であった [(13)]。この統一問題をめぐるゲアハルトを中心とするレオ一家の態度と，対して当時の東ドイツの一般的な市民との間の温度差については，本作品のなかではほとんど取り上げられていない。それはまた，東ドイツ社会主義体制下では，一般の労働者と異なり，学者や芸術家が比較的優遇された地位にあり，これらの職業グループの人々のなかには，統一後に失われてしまったかつての保障された創作環境（むろんそれは言論の自由の制約を甘受するという条件付きではあったが）を惜しむ声が高かったことも，平均的な市民生活との乖離を反映している。それはスイス旅行を許されたアンネが「DDR は監獄で赤い幹部のみがよい思いをするいやな独裁だ」（39 頁）と小学校の級友から非難されたことに象徴的である。またゲアハルトは特派員としてパリにも駐在し，西のお土産を携えて，フランス製の自動車シトロエンに乗って東ドイツに戻ってくるような人物であった。その意味からも，レオ家を中心とした世界を例にとって，東ドイツの日常 [(14)] とは言い難く，本書のドイツでの初版に際し，「驚くほどに DDR の

(12) Partei des Demokratischen Sozialismus = PDS. ベルリンの壁崩壊後の 1989 年 12 月にドイツ社会主義統一党（SED）が改組して SED-PDS となり，さらに 1990 年 2 月に SED の名称を廃して，民主社会主義党（PDS）となった。

(13) Sven Felix Kellerhoff, *Wer wollte die Wiedervereinigung?* https://www.bundesstiftung-aufarbeitung.de/de/recherche/dossiers/fakten-meinung-mythen-die-ddr-als-projektionsflaeche/wiedervereinigung（2023 年 8 月 25 日閲覧）。 東ドイツ末期からドイツ再統一までの政治状況についてはウルリヒ・メーラート著・伊豆田俊輔訳『東ドイツ史 1945–1990』白水社，2019 年（ = Ulrich Mählert, *Kleine Geschichte der DDR*, 7. Aufl., C. H. Beck, München 2010）邦訳版 201–202 頁を参照。

(14) かつての東ドイツの日常を伝える作品はノンフィクション及びフィクション共に，今日すでに豊富に存在する。シュタージによって監視された市民生活を扱ったフロリアン・ヘンケル・フォン・ドナースマルク（Florian Henckel von Donnersmarck）監督作品の映画『*Das Leben der Anderen*』（＝邦語版『善き人のためのソナタ』）が 2006 年に公開されると，かつての東ドイツ社会の知られざる側面に対する関心が急速に高まった。またウーヴェ・テルカンプの小説『塔』（Uwe Tellkamp, *Der Turm*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 2008）は，東ドイツ末期の市民の真の姿を描きだした作品として大絶賛されドイツでテレビドラマ化もされた。また 2018 年に公開されたアンドレアス・ドレーゼン（Andreas Dresen）監督作品の映画『*Gundermann*』（＝邦語版『グンダーマン』）では秘密警察に非公式に協力せざるを得ない状況に追い込まれる人々の苦悩が描かれた。東ドイツの日常を伝える邦語文献では，フランク・リースナー（Frank Riesner）著・清野智昭監修・生田幸子訳（2012 年）『私は東ドイツに生まれた――壁の向こうの日常生活』東洋書店，また河合信晴著（2015 年）『政治がつむぎだす日常――東ドイツの余暇と「ふつうの人びと」』現代書館などが代表的である。

日常を彷彿させる[15]」作品としてフランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング紙上で評されたが，このような見方はおよそ見当違いと言えよう。

本作品は史学研究書ではなく，著者自身の家族を対象とした私的な回想・ノンフィクションであり文芸書の部類に入るが，ここであえて形式的な問題を指摘すれば，本作品が部分的にはシュタージ文書などドイツの諸公文書館に収められている一次史料を使用しているにもかかわらず，一切正確な出所が記載されておらず，この点は残念と言わざるを得ない。また叙述の順序が，常に時系列に沿っているわけではなく，それぞれの家族成員に対する著者マクシムの思いに準じており，過去の事実と現在の対話を交互に織り交ぜつつリアリティーを醸し出す表現手法をとっているが，時に錯綜した印象を受ける。とはいえ邦訳版の文章の読みやすさ，こなれた日本語表現は，何よりも訳者・木畑和子の技量と見識に負うものであり称賛に値する仕事である。欲を言えば，カタカナ表記の人名，地名に対応する原語のドイツ語表記がわかるような索引がついていれば，より良かったのではなかろうか。

なお東ドイツで著名なジャーナリストであった著者マクシムの祖父ゲアハルト・レオを顕彰し，本作品が出版されてから10年以上が経過した2022年5月に，ベルリンの芸術アカデミー付属文書館にゲアハルト・レオ文庫が開設された[16]。ここには，ゲアハルトが生涯にわたって執筆した記事や著作品の草稿，レジスタンス時代の書簡や通信類に加え，ゲアハルトの父である弁護士ヴィルヘルム・レオ関連の史料，レオ家が代々保管してきた書簡類（そのなかには1831年付けのアレキサンダー・フォン・フンボルトとの文通もあるとされる），さらにアンネのもう一人の祖父であったダーゴベルト・ルビンスキーの獄中の書簡なども収蔵され，これら貴重な一次史料は現在，学術研究での利用に供されている。

（マクシム・レオ著，木畑和子訳『東ドイツ　ある家族の物語――激動のドイツを生きた，四代のファミリーヒストリー』アルファベータブックス，2022年11月，342頁，定価2,500円＋税）

（しんどう・りかこ　法政大学経済学部教授）

(15)　Sabine Brandt, Und am Ende vom Lied siegen doch die Bürger, in: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 31.10.2010. https://www.faz.net/aktuell/feuilleton/buecher/rezensionen/belletristik/maxim-leo-haltet-euer-herz-bereit-und-am-ende-vom-lied-siegen-doch-die-buerger-11057412.html（フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング紙上2010年10月31日掲載，2023年8月25日閲覧）。

(16)　Akademie der Künste, Berlin. https://www.adk.de/de/presse/pressemitteilungen.htm?we_objectID=64063（ベルリン芸術アカデミーHPより，2023年8月27日閲覧）。